

日蓮大聖人御書全集

さんさんぞうきょうのこと

三三蔵祈雨事

新版
1940
ゝ
1945

さんさんぞうきうのこと

三三蔵祈雨事

けんじがんねん

がつにち

さい

にしやまどの

建治元年('75)

6月22日

54歳

西山殿

そき植そうろう

おおかせ吹

そうら

強

助

夫れ、木をうえ候には、大風ふき候えども、つよきすけ

支倒

もと

お

そうろうき

ね

をかいぬればたおれず。本より生いて候木なれども、根の

よわ倒

かい

もの

ものつよ

弱きはたおれぬ。甲斐なき者なれども、たすくる者強ければ

けな

もの

ひと

あ

道

たおれず。すこし健げの者も、独りなれば悪しきみちには

倒

たおれぬ。

さんぜんだいせんせかい

しやりほつ

かしようそんじや

除

また、三千大千世界のなかには、舍利弗・迦葉尊者をのぞ

ほとけ世

出

たま

ひとり

さんあくどう

お

いては、仏よにいで給わずば、一人もなく三悪道に墮つべ

ほとけ 侍

べこうえん

いつさいしゅじょう

かりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて、一切衆生

多 ほとけ 成

あじやせおう 鵞 掘 魔 羅

はおおく仏になりしなり。まして阿闍世王・おうくつまらな

もう あくにん

叶 かなら あび

んど申せし悪人どもは、いかにもかなうまじくて、必ず阿鼻

じごく お

きようしゅしやくそん もう だいにん 行 合

地獄に墮つべかりしかども、教主釈尊と申す大人にゆきあ

たま ほとけ 成

わせ給いてこそ仏にはならせ給いしか。

ほとけ 道 ぜんちしき

過 我 智 慧 何

されば、仏になるみちは善知識にはすぎず。わがちえなに

熱 冷 ちえ

そうろう

にかせん。ただあつき・つめたきばかりの智慧だにも候な

ぜんちしき 大 切

らば、善知識たいせちなり。

ぜんちしき あ だいいち 難

しかるに、善知識に値うことが第一のかたきことなり。

ほとけ ぜんちしき あ

いちげん

亀

う ぎ

されば、仏は善知識に値うことをば、一眼のかめの浮き木

い

ぼんてん

糸

くだ

だいち

針

目

い

に入り、梵天よりいとを下して大地のはりのめに入るに

譬 たと

まつだいあくせ

あくちしき

だいちみじん

たとえ給えり。しかるに、末代悪世には悪知識は大地微塵よ

多

ぜんちしき

そうじよう

ど

少

りもおおく、善知識は爪上の土よりもすくなし。

ふだらくせん

かんぜおんぼさつ

ぜんざいどうじ

ぜんちしき

べつ

えんにきよう

補陀落山の観世音菩薩は善財童子の善知識、別・円二教を

教

じゆんえん

じようたいぼさつ

み

売

ぜん

おしえて、いまだ純円ならず。常啼菩薩は身をうつて善

ちしき

求

どんむかつぼさつ

値

つう

べつ

えん

さんぎよう

知識をもとめしに、曇無竭菩薩にあえり。通・別・円の三教

習

ほけきよう

教

しやりほつ

こんし

ぜんちしき

をならいて、法華経をおしえず。舍利弗は金師が善知識、

くじゆうにち

もう

せんだい

ひと

富楼那

いちげ

九十日と申せしかば、闍提の人となしたりき。ふるなは一夏

せつぼう だいじよう き しょうにん だいしろう ほけきよう 許

の説法に大乘の機を小人となす。大聖すら法華經をゆる

しょうか 羅漢 き 知 まつだいあくせ かくしやとう

されず。証果のらかな、機をしらず。末代悪世の学者等を

推 せん ち ひがし にし

ば、これをもつてすいしぬべし。天を地といい、東を西と

ひ みず ほし つき 勝 蟻 塚

いい、火を水とおしえ、星は月にすぐれたり、ありづかは

しゅみせん 超 もう ひとびと しん そうら ひとびと

須弥山にこえたりなんと申す人々を信じて候わん人々は、

習 あくにん 遙 劣 悪

ならわざらん悪人にははるかおとりてあしかりぬべし。

にちれん ぶつぼう 試 どうり しょうもん 過

日蓮、仏法をこころみるに、道理と証文にはすぎず。

どうり しょうもん げんしろう 過 い

また道理・証文よりも現証にはすぎず。しかるに、去ぬる

ぶんえいごねん ころ ひがし ふしゅ 起 にし もうこ 責

文永五年の比、東には俘囚おこり、西には蒙古よりせめ

使 着 にちれんあん い ぶつぽう しん

つかいつきぬ。日蓮案じて云わく、仏法を信ぜざればなり。

さだ じようぶく 行 じようぶく しんごんしゅう

定めて調伏おこなわれんずらん。調伏はまた真言宗にて

がっし かんど にほん さんかこく あいだ

ぞあらんずらん。月支・漢土・日本、三箇国の間に、しば

がっし かんど にほん にこく しんごんしゅう

破

らく月支はおく、漢土・日本の二国は真言宗にやぶらるべ

し。

ぜんむいさんぞう かんど わた とき とう げんそう とき

善無畏三蔵、漢土に亘つてありし時は、唐の玄宗の時な

だいかんぼつ きう ほう 仰 付 そうら

り。大旱魃ありしに、祈雨の法をおおせつけられて候いし

おおあめ かみいちにん しもばんみん おお よろこ

に、大雨ふらせて上一人より下万民にいたるまで大いに悦

しゆゆ おおかせふ きた こくど 吹 破

びしほどに、須臾ありて大風吹き来つて国土をふきやぶり

興 醒

しかば、きようさめてありしなり。またその世に金剛智三蔵

あめ おん 祈

よ こんごうちさんぞう
しちにち うち おおあめふ

わたる。また雨の御いのりありしかば、七日が内に大雨下る。

かみ よろこ

ぜんだいみもん おおかげふ

上のごとく悦んでありしほどに、前代未聞の大風吹きしか

しんごんしゅう

恐

あくほう

がつし

追

ば、「真言宗はおそろしき悪法なり」とて月支へおわれし

留

おな

みよ

ふくうさんぞう

が、とこうしてとどまりぬ。また同じき御世に、不空三蔵、

あめ 祈

みつか

うち

おおあめふ

よろこ

前

雨をいのりしほどに三日が内に大雨下る。悦びさきのごと

おおかげふ

にど

夥

すうじゅうにち

し。また大風吹いて、さき二度よりもおびただし。数十日

止 ふかしぎ

にほんこく

とどまらず。不可思議のことにてありしなり。これは日本国

ちしや

ぐしやいちにん

知

知

の智者・愚者一人もしらぬことなり。しらんとおもわば、

にちれん い

とき

詳

尋

習

日蓮が生きてある時、くわしくたずねならえ。

にほんこく

てんちようがんねんにがつだいかんぼつ

こうぼうだいし

しんせん

日本国には、天長元年二月大旱魃あり。弘法大師を神泉

えん

きう

しゅびん

もう

ひと

苑にして祈雨あるべきにてありしほどに、守敏と申せし人、

進

い

こうぼう

げろう

われ

じようろう

仰

すすんで云わく「弘法は下臈なり。我は上臈なり。まずおお

被

もう

請

したが

しゅびん

行

しちにち

せをかぼるべし」と申す。こうに随つて守敏おこなう。七日

もう

おおあめふ

きようじゆう

いなか

と申すには大雨下る。しかれども、京中ばかりにて田舎に

こうぼう

仰

付

しちにち

ふらず。弘法におおせつけられてありしかば、七日にふら

にしちにち

さんしちにち

てんし

われ

ず、二七日にふらず、三七日にふらざりしかば、天子、我と

祈

あめ

たま

とうじ

もんじんとう

わ

いのりて雨をふらせ給いき。しかるを、東寺の門人等、我が

し あめ 号 詳 につき 引 なら てんか

師の雨とごうす。くわしくは日記をひいて習うべし。天下

だいいち 誑 惑 ほか こうにんくねん はる

第一のわわくのあるなり。これより外に弘仁九年の春の

疫 癘 さんこ投 ふかしぎ おうわく

えきれい、また三鉗なげたることに、不可思議の誑惑あり。

くでん

口伝すべし。

てんだいだいし ちん よ だいかんぼう 読 しゆゆ

天台大師は、陳の世に大旱魃あり、法華經をよみて須臾に

あめふ おうしん 頭 傾 ばんみん 掌 合

雨下らす。王臣こうべをかたぶけ、万民たなごころをあわ

せたり。しかも大雨にもあらず、風もふかず、甘雨にてあ

ちんおう だいいし みまえ かぜ 吹 かんう 歸

りしかば、陳王、大師の御前におわしまして、内裏へかえら

んことをわすれ給いき。この時、三度の礼拝はありしなり。

忘 たま とき さんど らいはい

んことをわすれ給いき。この時、三度の礼拝はありしなり。

い こうにんくねん はる だいかんぼつ さ が てんのう まつな

去ぬる弘仁九年の春、大旱魃ありき。嵯峨の天皇、真綱と

もう しんか ふゆつぐ 執 もう ほけきよう

申す臣下をもつて冬嗣のとり申されしかば、法華経・

こんこうみようきよう にんのうきよう でんぎようだいしきう みつか

金光明経・仁王経をもつて伝教大師祈雨ありき。三日と

もう ひ 細 雲 あめ 静 々 ふ

申せし日、ほそきくも・ほそき雨しずしずと下りしかば、

てんし 喜 たま にほんだいいち 難 事

天子あまりによるこばせ給いて、日本第一のかたことたり

だいじようかいだん 許 でんぎようだいし おんし ごみよう もう

し大乘戒壇はゆるされしなり。伝教大師の御師・護命と申

しようにん なんとだいいち そう しじゅうにん みでし 相 具

せし聖人は、南都第一の僧なり。四十人の御弟子あいぐし

にんのうきよう きう いつか もう あめふ

て、仁王経をもつて祈雨ありしが、五日と申せしに雨下り

いっか みつか 劣

ぬ。五日はいみじきことなれども、三日にはおとりて、し

あめ 荒

かも雨あらかりしかば、まけにならせ給いぬ。これをもつ

こうぼう

あめ

推

たも

負

たま

て弘法の雨をばすいせさせ給うべし。

ほけきよう

しんごん

疎

そうろう

にほん

かく法華経はめでたく真言はおろかに候に、日本の

亡

いつこうしんごん

おきのほうおう

ほろぶべきにや、一向真言にてあるなり。隠岐法皇のこと

思

しんごん

もうこ

蝦夷

をもつておもうに、真言をもつて蒙古とえぞとを

調 伏

にほんこく

負

推

じようぶくせば日本国やまけんずらんとすいせしゆえに、

命

捨

言

思

言

このこと、いのちをすてていいてみるとおもいしなり。いい

とき

弟子

制

今

合

こころ

し時は、でしらせいせしかども、いまはあいぬれば、心よ

かんど

にほん

ちしや

ごひやくよねん

あいだいちにん

知

かるべきにや。漢土・日本の智者、五百余年が間一人もし

勘 そろう
らぬことをかんがえて候なり。

ぜんむい こんごうち ふくうとう きう あめ ふ

善無畏・金剛智・不空等の祈雨に、雨は下つて、しかも大風

添 そろう

こころ得

たも

げどう ほう

のそい候は、いかに心えさせ給うべき。外道の法なれ

言

どうし

ほう

あめふ

ども、いうにかいなき道士の法にも雨下ることあり。まし

ぶつぼう

しょうじよう

ほう

おこな

て仏法は、小乗なりとも、法のごとく行うならば、いか

あめふ

況

だいにちきよう

けごん

はんにな

でか雨下らざるべき。いおうや、大日経は、華嚴・般若に

及

あごん

勝

そろう

こそおよばねども、阿含にはすこしまさりて候ぞかし。

祈

あめふ

あめ ふ

いかでかいのらんに雨下らざるべき。されば、雨は下つて

そうら

おおかせ

添

おお

ひがごと

彼

ほう

なか

候えども大風のそいぬるは、大いなる僻事のかの法の中に

まじわれるなるべし。弘法大師の、三七日に雨下らずして

そうろう

てんし

あめ

わ

あめ

もう

ぜんむいとう

おお

候を、天子の雨を我が雨と申すは、また善無畏等よりも大

勝

とが

いにまさる失のあるなり。

だいいち

だいもうご

こうぼうだいし

じひつ

い

こうにんくねん

第一の大妄語には、弘法大師の自筆に云わく「弘仁九年の

はる

えき

癘

祈

よなか

ひ出

春、疫れいをいのりてありしかば、夜中に日いでたり」と

うんぬん

虚

事

言

ひと

にちれん

もんけ

云々。かかるそらごとをいう人なり。このことは日蓮が門家

だいいち

ひじ

ほんもん

取

詰

ぶつぼう

第一の秘事なり。本文をとり、つめていうべし。仏法はさ

かみ

書

てんかだいいち

だいいじ

伝

ておきぬ、上にかきぬること、天下第一の大事なり。つて

仰

おんこころ

至

そうら

におおせあるべからず。御心ざしのいたりて候えば、

驚

おどろかしまいらせ候。

そうろう

にちれん

日蓮をば、「いかんがあるべかるらんとおぼつかなし」と

思

おぼしめすべきゆえに、かかる事ども候。むこり国だに

強

責

そうら

こんじよう

広

そうら

もつよくせめ候わば、今生にもひろまることも候いなん。

激

当

ひとびと

悔

辺

あまりにはげしくあたりし人々は、くゆるへんもやあらん

ずらん。

げどう

もう

ぶつぜんはつびやくねん

始

初

外道と申すは、仏前八百年よりはじまりて、はじめは

にてんさんせん

漸

分

くじゆうごしゆ

二天三仙にてありしが、ようやくわかれて九十五種なり。

なか

おお

ちしや

じんずう

者

いちにん

しょうじ

その中に多くの智者、神通のものありしかども、一人も生死

離

きえ

ひとびと

ぜん

あく

みな

をはなれず。また帰依せし人々も、善につけ悪につけて、皆

さんあくどう

お

そうら

ほとけしゆつせ

たま

三悪道に堕ち候いしを、仏出世せさせ給いてありしかば、

くじゅうごしゆ

げどう

じゅうろくだいこく

おうしん

しよみん

語

九十五種の外道、十六大国の王臣・諸民をかたらいて、あ

罵

打

でし

檀

那 とう

るいはのり、あるいはうち、あるいは弟子あるいはだんな等、

むりようむへん

殺

ほとけ

弛

こころ

われ

ほうもん

無量無辺ころせしかども、仏たゆむ心なし。「我この法門

しよにん

脅

言

止

いつさいしゆじようじこく

を諸人におどされていいやむほどならば、一切衆生地獄に

お

強

歎

たま

たい

こころ

堕つべし」とつよくなげかせ給いしゆえに、退する心なし。

げどう

もう

せんぶつ

きようぎよう

み

読

損

この外道と申すは、先仏の経々を見て、よみそこないて

そうら

こと 起

候いしより事おこれり。

いま

にほん ほうもんおお

みなもと

今もまたかくのごとし。日本の法門多しといえども、源

はっしゅう くしゅう じっしゅう

起

じっしゅう

けごん

は、八宗・九宗・十宗よりおこれり。十宗のなかに華嚴

とう しゅうじゅう

しんごん てんだい

しょうれつ こうぼう

じ

等の宗々はさておきぬ、真言と天台との勝劣に弘法・慈

かく ちしゅう

惑

にほんこく

ひとびと

こんじよう

たこく

覚・智証のまどいしによりて、日本国の人々、今生は他国

責

ごしよう

あくどう

お

かんど

亡

にもせめられ、後生にも悪道に墮つるなり。漢土のほろび、

あくどう

お

ぜんむい

こんぐち

ふくう

誤

また悪道に墮つることも、善無畏・金剛智・不空のあやまり

始

てんだいしゅう

ひとびと

じかく

ちしよう

のち

よりはじまれり。また天台宗の人々も、慈覚・智証より後

ひとびと

ちえ

塞

てんだいしゅう

は、かの人々の智慧にせかれて天台宗のごとくならず。さ

況

にちれん

彼

過

れば、「さのみやはあるべき。いおうや日蓮はかれにすぐべ

我　でしとう　思

ほとけ　きもん

違

き」とはわが弟子等おぼせども、仏の記文にはたがわず。

まつぼう　い

ぶつぼう

謗

むけんじごく

お

者

「末法に入つて、仏法をぼうじて無間地獄に墮つべきもの

だいちみじん

おお

しょうほう

得

ひと

そうじよう

ど

は大地微塵よりも多く、正法をえたらん人は爪上の土よ

少

ねはんぎよう

説

ほけきよう

りもすくなし」と涅槃経にはとかれ、法華経には「たとい

しゆみせん

投

者

わ

まつぼう

ほけきよう

きよう

須弥山をなぐるものはありとも、我が末法に法華経を経の

説

もの有

難

しる

置

たま

ごとくにとく者ありがたし」と記しおかせ給えり。

だいじつきよう

こんこうみようきよう

にんのうきよう

しゆぎきよう

般

泥

洹

きよう

大集経・金光明経・仁王経・守護経・はちないおん経・

さいしやうおうきようとう

まつぼう

い

しょうほう

ぎよう

ひとしゆつたい

最勝王経等に、「末法に入つて正法を行ぜん人出来せ

じゃほう

者

おうしんとう

訴

か

おう

ば、邪法のもの、王臣等にうつたえてあらんほどに、彼の王

しんとう

たにん

言葉

付

いちにん

しょうほう

者

臣等、他人がことばについて、一人の正法のを、ある

罵

責

流

殺

いはのり、あるいはせめ、あるいはながし、あるいはころさ

ぼんのう

たいしやく

むりよう

しよてん

てんじん

ちじんとう

隣

国

ば、梵王・帝釈・無量の諸天・天神・地神等、りんごくの

けんおう

み

い

替

くに

亡

しる

たま

賢王の身に入りかわつて、その国をほろぼすべし」と記し給

いま

よ

に

そうろう

えり。今の世は似て候ものかな。

おのおの

しゆくぜん

にちれん

とぶら

たま

そもそも、各々はいかなる宿善にて日蓮をば訪わせ給

よ

よ

かこ

おんたず

な

えるぞ。能く能く過去を御尋ねあらば、なにと無くとも、

たびしようじ

はな

たも

須

利

槃

特

さんかねん

この度生死は離れさせ給うべし。すりはんどくは、三箇年に

じゆうしじ

そら

ほとけ

な

だいば

ろくまんぞう

十四字を暗にせざりしかども、仏に成りぬ。提婆は、六万蔵

そら

むけん

お

まつだい

いま

よ

ひよう

を暗にして無間に堕ちぬ。これひとえに末代の今の世を表

ひと

うえ

おぼ

ことしげ

するなり。あえて人の上と思しめすべからず。事繁ければ、

とど

お

そうら

お

止め置き候い畢わんぬ。

とうじ

そうそう

おんこころざしもう

そうら

そもそも、当時の恩々に、御志申すばかり候わねば、

だいじ

粗

々

驚

そうろう

大事のこと、あらあらおどろかしまいらせ候。

大

角

豆

あおだいず

た

そうら

ささげ・青大豆、給び候いぬ。

ろくがつにじゅうににち

六月二十二日

にしやまどのごへんじ

西山殿御返事

にちれん

かおう

日蓮

花押